



Dear Michi letter from New Zealand

今日莉子ちゃんに会いに、ホームステイに行つて来ました。渋谷で初めてミーティングをした時は小5年でしたね。ちょうど1年前の12月を思い出しました。身体も心も英語も成長しましたよ。クリスマスの帰国を楽しみにして下さい。 荒川千明 (アマカル社長)

Dear Michi letter from Japan

お世話になっております。初めての名古屋の夏ですが、あまりの暑さに早くも夏バテ気味です。先生もバンクーバーから戻られてこの暑さなので、お疲れを出されぬようお気を付け下さいませ。莉子はこちらに帰つて来て歯医者、美容院、整体やショッピングに神戸旅行など毎日元気に過ごしてNZに戻りました。今回はお友達5人とKellyとお姉さんには日覚まし時計とフォトフレームやたくさんのお菓子をお土産に持って帰りました。ますます女子高生の様になり、ああ言えばこう言うで自己主張をはっきりするようになっていました。体調も良く食欲もあるようで安心しました。難波先生をはじめあちらのお父様やお母様、アマカルの皆様に本当に感謝しております。有難うございました。引き続きどうぞ宜しくお願い致します。 鉄井莉子 (母)

Dear Michi letter from New Zealand

ニュージーランドへ留学する前、私はあまり学校が楽しいとは思えず、毎日が目標もない先の見えない日々でした。自分は勉強も得意ではないのに、何か特別なことが人一倍できるわけでもなく、なかなか自らに自信を持つことができなかつたのです。私が今回ニュージーランドへ留学することになったきっかけは「自分をかえるため」です。もともと留学する予定は特になかつたし、将来の夢が国際的な仕事というわけでもなかつたから、単純なきっかけでいざ未知の世界へ一人で飛び込みました。現地へ到着しホストファミリーの家へ行くとき英語もまともに話すことができない私を、温かく迎えてくださり、それぞれの部屋や家のルールを細かく説明してくれました。最初は緊張して伝えたいことも伝えられなかつたのですが、今や家族の一員のように話しかけてくれるファミリーと楽しく話せています。しかし家族だからといって、彼らへの尊敬の念を忘れてはいけません。留学生の私のためにご飯を作ってくれたり、洗濯をしてくれたりなど私はいろいろな面で国をまたいで支えられていることは、なによりも大切なことであると日本を離れて強く感じました。日本人同士では簡易化されるあいさつや感謝の意も、きちんと英語で伝えることがコミュニケーションをとる第一歩です。ニュージーランド人もとい、キウイの人々も他の国の外国人もその人に対して自分が思っていることをはっきりということが大切です。私の場合、日本では学校に行きたくない時期もあつたので、なおさらニュージーランドで通っている学校のなかで英語で話してコミュニケーションすることが楽しくなり、いまの目標は「新しいスポーツに挑戦すること」です。きっと数か月前の私では何かに挑戦するという心構えも、余裕もなかつたのにここまで自分が成長したのは、やはりニュージーランドの学習方針と自然いっぱいの地で暮らす人々の温かさが自分を根本的に変えてくれたのだろう、とつくづく思いました。



加納佑麻 (中学三年14歳)

Dear Michi letter from Japan

先月末に嬉しいニュースがありました!ル・コルドンブルーNZのキュージーズコース (中級)で、実技とペーパー共に一番になったとのこと!本当に嬉しいです。また、毎日時間のある限り実習アシスタント (ボランティア)を、早朝から夜まで非常に良くやってくれた、といて学校が令史を高く評価してくれ、特別に表彰してくれたのだそう!これまで前例のない表彰だったらしく、しかも令史のためにトロフィーまで作ってくれたんだとか!

令史曰く、アシスタントは無料で勉強出来る願ってもないチャンス!やりたくてやらせて貰っているだけなのに、表彰だなんて…と不思議に思うようです。ですが、やはり特別に認めて貰えたことは10月中旬からの上級コースに向けての励みにもなるようで、また彼の人生にとっても随分とプラスの影響があると考えられます。前向きで貪欲な人間が正統に評価される技術や芸術の世界は、令史には本当に合っていると思います。以上、嬉しい近況報告でした。 和田令史 (母)



ICS International Collegues School of English 「ICS閉校に寄せて」 石川 祐子

英国東部・ノーフォーク州・ノリッチ市の中心部、ポッターゲートと名付けられた通り沿い、英国ならではの煉瓦で連なった建物の26番ドアに英語学校【ICS - International Collegues School of English】はあつた。大聖堂と城がランドマークのノリッチ市は、街並みが美しく歴史があり、人々はフレンドリーで治安が良く、【英国の住みよい都市】上位に躍り出たこともある。大都市より生粋の英国人が多いことから、外国人が英語を学ぶには最適な環境だと言えよう。1978年、ダグラス・ジャクソンと故デニス・ジャクソンのイギリス人夫妻とイラン人の友人の事業提案により開校されたICS。その翌年の1979年9月、26番ドアをノックした若い男性が1人、そのまた翌年の1980年6月、追うようにして若い女性もまた1人、それが昨夏までの総務担当のジョナサン・マヒューズと英語教師兼教務担当のヘレン・ゴースキーの2人だった。ヨーロッパ・南米・アジアから多国籍の留学生を受け入れる国際色豊かなICSは、一見雑居ビルを思わせる3階までの狭いフロアーに、いくつかの小さな教室があり、少人数制クラスの授業を行っていた。1992年6月、高校卒業からわずか3か月後に渡英し、ノリッチのICSに入学した私であったが、その26年後の2018年6月、この地で同じくして、私の一人息子・真生がヘレンとジョナサンにお世話になり、ICS創立者のダグラス、ノリッチを訪問中だった元クラスメイトのユカヤヌリとも顔を合わせたとは、なんとも不思議な光景であつたに違いない。昨夏、3か国から3名の2代目が現れたと聞いたが、それもICSが親しみやすく家庭的な雰囲気を持つ学校だったからであろう。約40年に渡り、ダグラスの引退後も、ICSの存続に貢献してきたヘレンとジョナサンであったが、学校の先行きをより慎重に考えた結果、過去の生徒たちや海外エージェンツに惜しまれつつ、2018年8月末をもってICSを閉校し、自らをもこの学校を卒業していった。ICS最終日、真生がこの英語学校のトリを務める生徒となり、私も親おおよび卒業生として、非常に感慨深く、大変光栄であつた。今は二世代に渡りお世話になったヘレンとジョナサンの新たな門出を慶んでお祝いたい。2019年3月、IHICSの伝統を取り入れつつ、新たな顔ぶれで新ICSが再始動する予定だ。40年変わらず軒を連ねるフィッシュ&チップス店、向かいのパブ、その隣のセント・グレゴリーズ広場が、再びICSと留学生たちを見守っていく日常の風景が目に見えよう。



ミッチー、こんにちは。大変ご無沙汰してます!ゆうこちゃんやヘレンからミッチーの近況など少しは聞いていました。もう何十年もお会いしていませんが、ミッチーは全然変わってないよ、とも聞いてます!お元気でしょうか。私は鹿児島で今でも英会話講師をしながら、主人一人(^^)と猫4匹とともに元気に過ごしております。ミッチーもご存じとは思いますが、去年25年ぶりにNorwichへ飛び、一週間ほど滞在しMr.Jacksonに会い、ICSで1:1レッスンを受け勉強してきました。ICSが今月でクローズになると今年春ごろ聞き、予定していなかつたのですが今年も行かなくては、という気になり、またまた行って来ました。ICSの閉校はとてとても残念でありませんが、今年の滞在中にはICSで25年前と一緒にNorwichへ行ったゆうこちゃん (石川ゆうこ)の息子、真生くんに会え、クラスメートだったトルコのヌーリにも会え、ICSならではの2世代に渡って受けられるスクールの良さを感じることができました。非常に残念です。ヘレンやジョナサンは閉校後もそれぞれ得意分野を生かして仕事を続けるそうですが、第二のhometownがなくなるような気分です。ミッチーもお変わりなくお忙しい日々をお過ごしのことと思います。東京はここ最近日中も過ごしやすくなったそうですが気温の急激な変化で体調をくずされませんように。

Dear Namba-san: letter from Canada

Thank you for your email.I apologize for being a little bit late in replying. Yes, I did visit Mio and Morishita-san and his family were very welcoming and generous on assisting me during my stay. I also was able to meet with distant relatives from my late mother's side of our family. I was also assisted by the obon-san of the Buddhist church to show me the way to my grandparents' graves. This was quite a few years ago and I then wrote a very large article in The Vancouver Sun newspaper- which was re-printed across Canada and on the internet.I would love to visit again-- but it's very difficult and of course, expensive. My last time in Japan was in 2010 when my book of short fiction had been translated and I was in Japan for the celebration and to do readings and talks in colleges and universities.Thank you for contacting me. Gerry Osamu Shikatani

ICS閉校の知らせを聞いて正直びっくりしております。SNSなどで生き生きとした近況が常に入っていたので…私がICSに在籍したのは延べ1年。今から30年近く前、1991年の夏の4週間と1992年4月半ばから1993年の2月半ばの2回です。MICH Iからのすすめもありましたが、某大学の英文科にしながら古典の授業が多く英会話がまったく上達しないことに焦りを感じたこともあり、ICSへの語学留学を決めました。初めて渡英したときは、オーバーブッキングで飛行機の便が変わってしまい、迎えのスタッフを数時間待たせてしまうというアクシデントもありました (当然、携帯電話なんてありませんから連絡のしようがない…) また1992年の渡英時、1年近い海外生活ということもあり、初めはさすがに心細かつたのですが、LondonからNorwichへの列車の車窓から見えた、鮮やかな菜の花畑に勇気もらったのを覚えています。在籍したことのある生徒はわかると思いますが、ICSは本当に親身になって勉学のサポートをしてくれました。最初の短期留学では米・英の発音の違いに戸惑いましたが、再渡英した際はみるみるうちに上達していくのを実感することができました。またいろいろな国からやってくる生徒たちにもいろいろな刺激をもらいました (一部の生徒とは未だにSNSなどで近況を交換しています)さらには時々あるExcursionやEventも思い出に残っています。みんなで劇をしたこと (あ、これは授業の一環か…) Julianという教師とビートルズのコピーを演奏するデュオを組み、イベントで何度も歌つたこと。出身の国の料理をシェアするInternational Eveningでは「お好み焼き」を持っていきました。それがきっかけとなりイギリスのテレビ番組にも出たなあ…本当にいろいろなことを思い出します。また地元のサッカークラブであるNorwich Cityの試合観戦にも何度も行きました。この経験が今の仕事にもかなり生きています (今は低迷していますが、Cityはあの年、プレミアリーグの3位だったんです) 残念ながら今の仕事では英語を使う機会があまりなく、いまでは日常会話レベルの英語を聞けばはするものじゃべることができなくなつてしまいました。できれば近々もう一度渡英して、勉強のやり直しを考えていたところです。でもMr.Jacksonをはじめ、HelenやJonathanなど、ICSで出会つたスタッフや生徒の皆さんには感謝しかありません (もちろん、MICH Iも…) できれば“同窓会”みたいな形で再会の機会があればいいなと思っています。



数か月前、イギリス留学した時に通つたICS閉校の知らせを受けました。通学したのは20年以上も前ですが、突然の知らせに驚きつつも久しぶりに懐かしい日々を思い出しました。当時の私は長年の夢だった留学を叶えイギリスに二年滞在しましたが、親元を離れ単身海外で暮らす意味をきちんと理解しておらず、結局ホームシックが解消されぬまま過ごしました。ですが、家族のいない寂しさ、日本を離れる不安、母国語、和食の恋しさを抱えながらも海外での生活は何にも勝る素晴らしい経験でした。勿論「留学」なので目的は修学ですが、世界各国の様々な境遇に置かれる人達との出会い、文化や歴史、思想にも触れあう機会でもあつた為、一方で私は学業以上に付加価値的に価値ある多くを修得し、多大な影響を受けたと思います。自国を顧みて、己の育つた環境を改めて感謝した事もありました。何よりこの経験が新たな世界観や価値観をもたらし、私を柔軟にしてくれた様に思います。そして、いつしか「出会い」の意義を考える様になりました。語学学校には世界中から留学生がやってきます。私は1年程いたので新入生を迎えては送り出す…それを何十人と繰り返しました。欧州、アフリカ大陸・アジア、中東諸国、中には内戦国、民族迫害、難民等、情勢が不安定な国、新聞記事から飛び出したような人達との出会いもありました。当時の私には強烈でしたが、彼らとまたいつか元気に再会する事が出来るのだろうか…、そう思うようになり、語学留学生は個々の意義や目的があるからこそ多種多様な重みを感じるのだと思いました。現在は一児の母となり、障がい児向けの児童発達支援施設を運営する主人を傍ら手伝っておりますが先日、息子を初めて海外に連れて行きました。渡航先はフランス。障がい児の息子との旅行に不安がありましたが、結果は想像とは裏腹に最高に楽しい旅行でした。ありのままの息子が普通に受け入れられ、気づくと仏語、英語、日本語を交えて楽し気に現地の人達と交流していました。一方フランス語を話せない私は、片言のフランス語と、かつて学んだ英語を駆使して交流させて頂きました。フランスで出会つた人達との一期一会…、忘れられない出会いです。この度の学校閉鎖に伴い、当時大変お世話になった先生方に改めてお礼を申し上げたいです。祖父が他界した時、全力で支えようと親身に寄り添つて下さつた事、今でも心の糧となっています。又、出会いの大切さ、意味深さを学んだのもICSであり、今の私は此処で培われたと思っております。皆様様のこれからのご健勝を心よりお祈り申し上げます。